

## 開催趣旨(代表世話人ご挨拶)

謹啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、2018年3月17日(土)に東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにて、「百寿社会の展望」シンポジウムを開催する運びとなりました。

2015年、我が国では、65歳以上人口の総人口に対する割合が、26.7%となり、「超高齢社会」が急速に現れました。生の尽きるまでの「生命寿命」は延伸する一方で、社会的に自立して生きることのできる時間、「健康寿命」は伸び悩み、その10年のギャップは一向に縮まる様相がありません。3.2秒に1人発症する認知症、その家族の介護負担、社会全体の負荷の増加、終わりの見えない延命治療、安楽死の是非と個人の尊厳など、解決を見いだせないままに現代医療は継続されています。一方、今後、婚姻件数、出生数の低下による少子化が加速され、高齢者人口割合が高いまに、確実に人口全体は縮小していきます。また、地方のまちから人々は離散し、公共サービスの低下との悪循環のなか、我々の生活空間は限定、劣化しています。ようやく、人々は、自らの終末期の生活の有り様、それを支える社会そのものの持続可能性に対して不安を抱くようになりました。

百歳に達する、いわゆる百寿者(センチネリアン)は6万人を超え、今生まれた子供たちの半数は100歳以上生きることができるようになるとされています。しかし、長く生きながらえたその先に、「幸福」は待っているのでしょうか？

「幸福」とは、人が生きたいと望む理由です。「幸福」は、pleasure(快樂), engagement(仕事), meaningful(意味)の三つのとらえ方があり、その実現には、身体的のみならず、精神的、さらには、社会的な充足感が望まれます。

病勢の進行遅延、延命をひたすら追い求めてきた医療から脱し、個々人の疾病発来を超早期に捉え、いち早く介入し、ライフコースを操作する“先制医療 (pre-emptive medicine)”の重要性が認識され始めています。また、食事療法、腸内細菌叢整備、あるいはエクササイズ、マインドフルネスなどの先制的予防法も提案されています。高齢者には、疾病克服以外に、労働意欲と社会貢献、社会とのつながり、家族や対話者の存在などが、その「幸福」に大きく影響します。高齢者を支える、まちづくり、まち再生も始まっています。独居老人とAIに駆動されるロボットとの自在対話など、全く新しい発想のアプローチが試されることも期待されます。限られた社会資源の有効シェアリングも問題となります。

果たして、百年を超えるわれわれの人生に、「寿」はあるのでしょうか？我々ひとりひとりが「幸福」に向かうことができる、寛容と調和をもった「百寿社会」の実現が今こそ望まれています。本シンポジウムは、可能な限り多彩な領域から、さまざまな方々にお集まりいただき、我が国に現出した「百寿社会」という巨象を、それぞれの立場から「撫で評して」いただき、求心的にその全体像を浮き彫りにすることを意図して企画いたしました。

是非、本シンポジウム開催に向け、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

謹白

『自分の意志の弱さに驚いた時、わたしが思いついたイメージは、自分が象の背中に乗っている象使いであるというものだった。私は手綱を握り、あっちへ引っ張ったり、こっちへ引っ張ったりして、象に回れ、止まれ、進めなどと命令することができる。象に指令することはできるが、それは象が自分自身の欲望を持たない時だけだ。象が本当に何かしたいと思ったら、私はもはや彼にかなわない。』(「しあわせ仮説」 ジョナサン・ハイト著 藤澤隆史、藤澤玲子訳)

2018年2月吉日

百寿社会の展望 シンポジウム

代表世話人 伊藤 裕

(慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科 教授)